

初老の雑言

佐々倉航三

伊能忠敬という酒屋のおじさんは齢50才に乃んで天文学に志し、余生を日本全土の測量に捧げて立派な地図を完成しましたし、本居舜庵という町医者は30台の半に発心し、35ヶ年かゝつて古事記伝を著わしました。何れも日本における不朽の文化的業績として讃えられています。教会専属の音楽師ハーシェルは30代の中頃から天体観測に志し、丹念に星座を観測してついに天王星を発見し、第一流の天文学者となりましたし、その妹は兄君の仕事を手伝つて一かどの天文学者となり独身で世を終つたということです。又、メンデルというお寺の坊さまは20ヶ年かゝつて生物遺伝の原則を知りました。(もつともこの説は近時ルイセンコに依つて否定的に取り扱われているといわれてますけれども) 何れも所謂素人の中年者が教会に憑まれ、それに力をえて発奮した結果一流の専門家というはおろか、史的の学者となつたものです。

日本の現状では大学で3〜4年間ある学科について勉学すれば、その道の専門家と称せられ、学校卒業後全くなまけていても依然その道の専門家を以て遇せられます。が、又一方学校でその道を専攻しなかつたばかりに立派な業績を持つていても、とかくその人が軽視され素人あつかいされるということは、まことにこつけいです。勿論学校教育は有徳義であり基礎をしつかり固めなければ大成は期せられません。学校教育の有無だけで専門的乃至人間的教養を云々することの不可なることはいうまでもありません。国家の制度として形式的資格を云々するのはある程度止むを得ないことではありますが、私たちは死物の制度のとりことなつて、自らを小さな型に入れ小成に安んじたり又は卑屈になつたりすることはも頭ありません。

人生は悠久です。広く且つ深いものです。夏の夜空に悠久浮かぶあの積雲のように純白な姿と満溢な心を生涯の勉学にいそしまれることを祈つてゆみません。